

最初の駐日ロシア領事、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチ

ワジム・Yu・クリモフ

ヨシフ（オシフ）・アントノヴィチ・ゴシケヴィチ（一八一五～一八七五）は五等文官、一三カ国語に通じた東洋学者、日本、朝鮮、中国各民族の文化の研究者、膨大な書籍を収集し、その中には日本語で書かれた本も多数含まれていた。ヨシフ・アントノヴィチはロシアで事実上初めて「和露辞書」【橘耕斎との共著『和魯通言比考』のこと。この辞典のロシア語副題名が *Японско-русский словарь*（和露辞典）】を編纂した（一八五七年刊）。この業績に対して彼はデミドフ賞を授与された。I・A・ゴシケヴィチは、ロシアの学者、旅行家の中で初めて南アフリカを訪れる。彼は、初期の植物学者および動物学者の中で、インドシナ、フィリピン、中国、朝鮮、日本の植物および動物を数多く収集したひとりであった。後に彼はこのコレクションをロシア科学アカデミー動物学博物館に寄贈する。アカデミー会員A・シトラウフの著作『帝室科学アカデミー動物学博物館』の「博物館への収納品」の章に以下のこと記されている。「一八五六年 駐日ロシア領事ゴシケヴィチ氏より、アルコール漬けの日本の爬虫類」、「一八五七年 六等文官ゴシケヴィチおよび七等文官タタリノフより、中国の昆虫、主に蝶のコレクション」、「一八六一年 駐日ロシア領事ゴシケヴィチ氏より箱館から爬虫類および魚四四点」、「爬虫類コレクション 駐日ロシア領事ゴシケヴィチ氏より多数の日本種を博物館は受納した」。人名・書誌辞典に「ロシアの植物学者」の項目があり、そこには次のように記されている。「ゴシケヴィチ、

ヨシフ・アントノヴィチ——応用植物学の専門家、植物収集家、中国の農業植物研究の先駆者の一人」。そして最後に、ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチは、最初の駐日ロシア帝国領事なのである。

ヨシフ・アントノヴィチは一八一五年ミンスク県（現・ベラルーシのゴメリ州）で村司祭の家庭に生まれた。ペテルブルグ神学大学を卒業後、ゴシケヴィチは中国に派遣され、そこで一〇年間（一八三九～一八四八）ロシア正教団の一員として勤務した。語学的才能に恵まれた彼は、北京で数カ国の東洋語、すなわち中国語、満州語、朝鮮語、モンゴル語を修めた。一八五〇年、I・A・ゴシケヴィチは北京からペテルブルグに戻り、外務省アジア局付在外通訳官に任命された。一八五二年十月七日、彼は、E・V・プチャーチン遠征隊付通訳兼秘書としてフリゲート艦パルラーダ号で日本に出発した。

E・V・プチャーチン遠征隊に作家I・A・ゴンチャロフも同じく一員として参加していた。モスクワ大学学術コースを卒業後、ゴンチャロフはペテルブルグに行き、当時の通例に従って官職に就いた。彼は財務省に通訳の職を得、その後課長となり一八五二年までその職にあった。その年、かつての国民教育大臣A・S・ノロフの提言に従い、日本と通商関係を開くために準備された遠征隊に加わる。彼は皇帝の命令によって遠征隊長E・V・プチャーチン付秘書として派遣され、フリゲート艦パルラーダ号で航海に出発し、一八五五年の初めに帰国した。

I・A・ゴンチャロフはこの旅行についての自身の印象を『フリゲート艦パララーダ号』と題した本にまとめるが、その中でI・A・ゴシケヴィチについても一度ならず言及されている。以下その一部を紹介する。「我々が通訳と呼んでいたO・A・G（ゴシケヴィチ）が突然自分の船室の出入り口に姿を現した。青ざめた顔をし両手に枕を持った彼は共同船室に入ると丸いソファーに横になった。意識は朦朧としている。睡眠も食事も取っていないかった。五分ばかり横になった後、彼はソファーベッドに移り、それから椅子に腰を下ろした。が再び飛び起きて、どこにいても落ち着かない様子だった。出航後最初の船酔いの犠牲者となった彼は皆を心配させたが、同情も役には立たなかった。そこで彼を砲兵甲板に連れて行き、風通しの良いハッチの近くにハンモックが吊られた。私は自分が何かと腹立たしく思っていたことに気が咎め、不平を言うのを止めた。」：「『で、この人は？』、私たちはG（ゴシケヴィチ）の方を指さした。彼は長いこと考えていた。と、誰かが『彼は中国に一〇年住んでいた』とG（ゴシケヴィチ）のことを言った。『実際彼は中国人に似ている！』とフェリストフェリドが言った。我々は大笑いをし、彼も一緒になって笑った。G（ゴシケヴィチ）は出自は小ロシア人【ウクライナ人】であった。純粋なロシア人は私とZだけであった。彼はどうやらG（ゴシケヴィチ）に勇者の姿、あるいはもしかしたら、幾らか動物的な風貌の人間を期待していたようであったが、G（ゴシケヴィチ）が地質学も研究していること、艦には多くの学者がおり、文学者もいることを知り驚いていた。」：「その時G（ゴシケヴィチ）はおごそかにへビを持ってきた。長さ二アルシン【約一m四〇cm】の太いやつで、我々は、大蛇を除いては、そんな大きなへビは見たことがなかった。」：「私は、岬の向こうに消えた補助艇に向かって、海と思しき方向を目指して岸伝いに歩き始めたので、三露里【約三・二km】近く歩かざる

得なかった。ほどなくB（男爵）Sh（シュリペンバフ）とG（ゴシケヴィチ）が合流したが、G（ゴシケヴィチ）のバッグの中では何か生き物がうごめいていた。すでにこの間に彼はありとあらゆるものを集めており、両手には花と草の束を持っていた。」

I・A・ゴシケヴィチの著作『日本語の起源について』（ヴィリノ、一八九九）の序に、彼の略歴が出版者によって次のように付されている。「I・A・ゴシケヴィチの著作『日本語の起源について』を出版するに当たり私は、氏の略歴をこの労作の前に付すことを不可欠と見なすものである。ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチは一八一四年に生まれた。サンクト・ペテルブルグ神学大学の所定のコースを修了後、一八三九年北京の正教団に任命され、当地で一〇年滞在した。その間彼は、中国語の研究とは別に、気象およびその他の自然の物理学的現象の観察に従事し、それらの観察結果は出版するために後に中央物理観測所に報告された。中国から帰国後、ゴシケヴィチはプチャーチン遠征隊付の通訳兼秘書として一八五二年日本に向かい、日本が初めてロシア艦船に門戸を開くこととなる一八五五年の条約の締結に主たる助力をした。」

「日本での停泊地下田での地震の際、フリゲート艦「デアアナ号」が難破した後、ゴシケヴィチは乗組員の一部と共に英国の捕虜となり、最初は香港、後に英国に送られ、クリミア戦争の終結後に初めて捕虜から解放され祖国への帰還を果たした。香港滞在時のことは『在北京ロシア正教団論集』に所収の論文の中で彼自身が記述している。

「一八五七年ゴシケヴィチは最初の和露辞典を刊行し、その編集に対して皇帝からお褒めの印に預かり、デミドフ賞を授与された。同年初代駐日ロシア領事に任命された。」

「このように、彼は日本に向けて二度目の出発をすることとなったが、その時の日本は、従来の鎖国体制と異国の事物すべてに対する無条件の

敵意を放棄し始めたばかりの時期であった。孤立した港箱館に滞在することとなったロシア外交団の状況はきわめて困難で、危険でさえあった。日本政府が行っていた初めての自由主義的な試みは民衆の全体的不満を呼び起こし、その怒りが外国人に向けられ、殺人が頻繁に起こり、その犠牲となったのは主として公的地位にある人間であったからである。

「このためゴシケヴィチは日本できわめて困難な時期を過ごすこととなったが、日本人への対処がたくみだったこと、さらにその不屈な性格のおかげで、国内で高い地位を獲得することができ、ロシア政府と日本政府の間に満足すべき関係を取り結ぶことに成功した。

日本の東部地域の旅行と滞在時にゴシケヴィチは自然学に多くに時間を割いた。残念なことに、彼の収集したコレクシヨンの大部分は箱館の領事館の建物を全焼した火事の際に焼失し、一部のみが帝室科学アカデミー博物館に自身によって寄贈されている。ちなみに、彼によって初めて調査された昆虫の幾つかに彼の名前が入っている (Lasionmata Goshikevitschii chrysochus, Smerintus G., Boarmia G., Mitela G.)。それ以外に彼は様々な問題 (例えば、養蚕業、墨の製造法など) に関する論文を『在北京ロシア正教団論集』に掲載した。

「しかしながら、このような困難な状況の中で勤務が大きく影響して、ゴシケヴィチは完全に健康を損ね、日本からロシアに帰国後の一八六七年には国家勤務を退くことを余儀なくされた。

「その後ゴシケヴィチはヴィリノ県の自分の領地に移り住み、東洋諸言語の研究を続けた。その成果が彼の真の著作とも言うべき『日本語の起源について』であるが、完成したのは殆ど死の直前の一八七五年であった。」

一八五七年十二月二十一日文官関係省庁に対する皇帝令により文官ゴシケヴィチは、箱館在勤駐日ロシア帝国領事に任命されている。職務に

従って領事は、箱館に寄港するロシア艦船の乗組員に助力することになっていた。

箱館在任の七年間 (一八五八―一八六五) にゴシケヴィチは多くを為し遂げた。領事館の建物、海軍病院、正教教会の建設、ロシア語学校の開設、亀田村での副業経営の組織化などがそうである。

箱館の初代ロシア領事ゴシケヴィチの活動は、ロシアと日本両国の人々の相互知己と接近に大きく寄与した。

一八五八年以前には、東洋の諸隣国についてロシア社会が持っていた観念はきわめて間接的なものであったとすれば、I・A・ゴシケヴィチとその同僚が箱館に拠を置いたことにより多方面な情報が元から直接入ってくるようになった。箱館の領事館は一八五八年から一八六五年まで日本における唯一のロシアの公式代表機関であった。領事館を通して外交接触のみならず文化交流も行われた、すなわちゴシケヴィチは実質的に大使の機能を遂行していた。E・V・プチャーチンが名付けたところの「かくも見事なる国」とのその後の関係のすべての基礎が置かれたのもこの時である。領事館職員の啓蒙活動のおかげで外国語のうち当時北海道で最も普及していたのはロシア語であった。外国人に対する警戒的態度という状況下で、ロシアの外交官たちは、その如才のない行動と地域住民に有益な事業を行うことで、ロシアに対する尊敬の念を日本人に起こさせることに成功した。

ロシア人が尊敬されたのは、土地の習慣や文化を理解しようとする熱意によるものであった。当時せいぜい六千人の人口を数えるに過ぎなかった箱館の町は、有益な接触の影響で活気づいた。箱館領事館の職員たちは日本人の技術的開化に寄与した。I・A・ゴシケヴィチは「我々はこれまで日本では知られていなかった風力水車のモデルを作っているところである」と伝えている。ロシア艦船のうちの一隻から投光器が外さ

れ現地の港の照明用に贈られた。また、日本人は気圧計も初めて知った。ゴシケヴィチの名前は、箱館の住民が写真技術に接触するようになったことと関連している。

I・A・ゴシケヴィチ自身、その教養、語学力、学問的活動、人々に対する如才なさ与人間的態度でもって好意を一身に集めた。相手に対する素朴な態度、誠実な人柄を持つ彼は、至る所で日本人との善き関係を築くことに努力した。彼の報告書は極東における善隣関係を維持する意志をよく表している（例えば、一八五九年十月十五日付の新聞「北の蜜蜂」参照）。箱館で「白髪領事」と呼ばれていた彼は土地の習慣を遵守し、日本人の国民的尊厳を傷つけないこと、出来る限りの助力をした。

ゴシケヴィチが在任していた時期について詳しく見ることにする。
一八五八年秋クリッパ艦ヂギト号および露米会社のナヒモフ号が箱館停泊地に投錨した。

クリッパ艦艦長は海軍少将カザケヴィチ宛の報告書の中で次のように記している。「…十月二十四日午前一〇時、領事は私に委任されたクリッパ艦に乗り換えてきた。そして、正午、私は蒸気機関を稼働して箱館停泊地に入り、町に向かって岸から四哩のところまで錨を降ろした。同日領事が箱館奉行との初会見のために艦を離れる際クリッパ艦から礼砲七発が放たれた。規定に従って：」

日本の役人が直ちにクリッパ艦に姿を現した。パーヴェル・ナジモフの回想によると、「すぐにこれらの役人諸氏は領事が古い知人であることに気付いた。会話は英語で行われたが、役人たちは、隣人同士としてロシア語を習得するつもりであることを即座に言明することを忘れなかった。彼らと長い問答する時間はなかった。そこで領事は、奉行に必ず今日中にお会いしたいとの意向を伝えた。彼らは彼らで、今年後二時で奉行は休息の時間であるから応接はできない、と言うことを絶対的

義務とみなしていた。結局彼らは領事の不退転の要求に屈して、奉行に領事の到着を伝えることに同意した。」

一時間後六等文官ゴシケヴィチは、領事館職員とクリッパ艦ヂギト号の士官を伴って船長用ボートで陸に向かった。

ディアナ号が難破した後、I・A・ゴシケヴィチは下田の寺院に居住していた。そして今度も再び寺院に一時的に住まうこととなった。

パーヴェル・ナジモフは日記に次のように記している。「寺院に住まうというのがどういふものなのかであるが…それぞれの寺院に数十名の僧がいて、彼らが寝泊まりするための別棟があり、寺院とは通り抜けられる部屋あるいは廊下で結ばれ、それらが通常ヨーロッパ人のための居住場所となっていた…両側から僧たちに、もう一方は寺院で囲まれ、我々は丸一日彼らの祈祷、鐘の音、太鼓を打ち鳴らす音を耳にすることになるのである…。」

領事館の建物の建設が進んでいた。医師アルブレフトは次のように回想している。「…我々のところには病気の日本人を受け入れる病院がまだない。我々自身が未だにきわめて限定された空間の寺院に寝泊まりしている状態で、領事館が建設している住宅に冬までに移る見込みは少ない。それに加えて我々の所には私が最も必要とする医療助手がいない。従って今に至るまで私自身が調剤を行っている。今の私の実地医療は、一部診療所と化している私の住まいに来る患者の治療がすべてである。病気の日本人が最初来たのと同様に、私のところに日本の医師もやって来たが、彼は奉行の意向で、私の外来初期治療および専門治療を観察するためのものであった。その後更に二名の日本人医師が加わり、彼らは毎日私のところに客人として訪れた。」

ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチは、日本人との接触を軌道に乗せるべくできる限りの尽力をしていた。彼は現地の役人がヨーロッパ

バ文化の知恵を習得するに際して、如才なく、かつ上手に手助けをし、彼等をロシアの祝日に呼び、機会ある毎に自宅に招いた。

一八五九年の始まりを領事はロシアの習慣に従い、ロシア本国でもそうであろうように、盛大かつ厳かに祝うことにした。「キリスト聖誕祭の前夜、私のところに子供たちのための樅の木が作られ、子供たちすべてばかりか、ほとんどすべての役人がやって来た。上席の役人の一人は奉行からのちょっとした贈り物を持参した：我がご婦人たちがお菓子、絵、子供の本を配ったが、中でも日本人を驚かせたのがロシアの民族衣装であった。新年も多くの日本の役人が私のところで迎えたが、それを機会に仮装舞踏会を行い、クリツパー艦プラストウン号の士官が参加し、日本人たちはすべてのダンスの名前を書き留めた。そして一月一日の朝、当地の幼年学校生徒が私のところに遣わされてきた、そのうちの多くの者が英語を学習中であるが、一部の生徒からは祭日の後にロシア語の授業を始めたといふ申し出があった。三時に奉行自身がやって来たが、予め遣わされた役人は、アメリカの商業代表団はこのような栄誉にはこれまで浴したことがない、と指摘することを忘れなかった。私は謝意を表し、奉行の訪問は真にもって丁寧であることこの上ない、なぜならば私にはここでは私人ではないからである、と答えた。奉行と同行の役人十五名のために酒の肴が用意され、彼は四時間ばかり私のところで過ごした。」

春になって領事は、本州の西海岸に位置する新潟港調査のためにナジモフ大尉を派遣した(当時ロシア人はまだ本州をニッポンと呼んでいた)。一八五八年の条約に従い日本政府は翌年の一月から新潟を開港することが義務づけられていた。クリツパー艦デギト号は数日の予定で箱館を後にした。パーヴェル・ナジモフとコルニロフ大尉はボートで一連の入江や河口を回ったが、いずれも浅瀬であった。新潟港停泊地の測量をした結果、士官たちは上げ潮時の水位の上昇は八フット【約一m八四cm】

が限界で、港は日本海で吹くすべての風の中で最も強い北風と北東の風に直接曝されていることを確認した。新潟港は艦船の停泊には適さなかった。

コルニロフ大尉は日記に次のように記している。「：十日間の間切り帆走の後、我々はすっかりごこえてしまい、物は凍り付き、舷と甲板には氷片を付けたまま箱館に入港した。艦の姿を見るのはやりきれなかった。停泊地にいたのは帆柱を下ろしたプラストウン号のみで、岸と山は綿毛のような白い装いに覆われていた。常緑の松林のみが町の上の山腹を帯状に走り、木は山頂に行くに従ってどんどんまばらになっていった。しかし我々の到着は好天をもたらし、雪が溶け始めた：日本人の言う実に適切な表現を借りれば、すべてが活気づき、春めいてきた。そして我々は春の散歩を楽しみにしながら、冬の輝かしい終わりに向けて準備を始めた。演劇「検察官」、仮装舞踏会、病院内ではご婦人方のピクニックの準備に取り掛かり、一週間ごとの船舶日誌を発行した。領事館に附属する教会の建設が始まり、ご婦人方がその装飾を担当した。キリスト教徒追放後二百二十一年を経た今、日本での教会堂の建設に皆が参加している。：五月近くになって箱館は新しい、我々がまだ知らない装いをまとった。山は新鮮な緑に覆われた。：艦の集會室に花が飾られた。：この頃私は鉛鉱山に行く機会を得た。我が領事とアメリカのライス氏が見学に出掛けるところであった。それに、オランダの船長フォン・デル・カペレン、私、日本人二名が加わったというわけである。」

一八五九年東シベリア総督N・N・ムラヴィヨフが蒸気船アメリカ号で江戸に到着した。使節団の随員に同行したのはI・F・リハチヨフ大佐指揮下のロシア艦隊である。N・N・ムラヴィヨフは自分の行動を逐一アジア局長E・P・コヴァレフスキーに報告をしている。総督は次のように記している。「私はゴシケヴィチの助言に従い、箱館から日本の

最高会議宛に、国境に関する最終談判を行うために七月二十日に江戸に行く予定であることを伝えた。陛下により私に与えられた全権によるもので、七月十五日に箱館に戻ることを約束した。箱館でゴシケヴィチを乗船させ、艦隊と共に江戸に向かうが、江戸に二十日に到着するのはおそらく無理であろう。というのは艦船の運行速度が私が期待したよりも遅いからである。ただし、私が乗っている蒸気船アメリカ号は別で、どこにあっても常に先頭を走るのであった。」

江戸でヨシフ・アントノヴィチには己の仕事があった。外務省が彼に、一八五八年八月に調印された第二次露日条約の批准を委任していた。

ゴシケヴィチはN・N・ムラヴィヨフにサハリン問題に関する資料を用意したが、その持つ説得力は疑う余地のないものであった。

外務大臣ゴルチャコフ公爵宛の書簡の中でN・N・ムラヴィヨフは次のように述懐している。「サハリンに関して、期待された成功が得られなかった日本での私の交渉について（皇帝アレクサンドル二世は「期待された成功が得られなかった」の文言に自らの手で下線を引き、「極めて残念である」と書き添えている）：しかしながら、優秀な艦隊を伴った今回の私の日本の首都訪問は、今後日本人の頭に我々にとり有益な影響を与えるであろうことは言うまでもない。また、江戸にいる英国およびアメリカ合衆国の代表者たちは、私が江戸滞在中に日本政府に言い聞かせた友好的助言に満足するであろうことも疑いない。」

一八六〇年一月、日本の水域にロシア軍艦が現れた。I・F・リハチヨフ大佐が対馬島にコルベット艦ボサドニク号を派遣し、艦長ビリレフ侍従武官に対して、島に海軍上陸部隊を降ろし艦船停泊のための軍事基地建设に着手せよとの命令を出した。この行動についてリハチヨフはその時すぐにゴシケヴィチに報告せず、箱館で初めてそのことを伝えた。全権を持たないビリレフの行動は越権行為であった。I・A・ゴシケヴィ

チはリハチヨフに、ビリレフの「自主活動」は結果として善いことにならないであろうと一度ならず警告をした。箱館に將軍からの問い合わせが来た。日本政府が、公正かつ偏見のない決定をロシア領事から期待したのは正当であった、しかも、ゴルチャコフ大臣から領事に与えられた訓令は、將軍の要求の文言と、その精神において矛盾するものではなかっただけに尚更であった。訓令には次のことが記されている。「我々が望んでいるのは唯一、日本と我が国の貿易の確立と拡大である。それ以外のあらゆる形態、内政干渉についてのあらゆる考えは、我が国の政策とは無縁である。このことを日本政府に周知徹底するよう努力し、敵対的な鼓吹が我が国の意図に関して歪んだ観念を抱かせるようなことがないように注意されたし。」

ペテルブルグ宛の報告でI・A・ゴシケヴィチは次のように記している。

「アジア局にはすでにご存じの例の対馬の一件は解決された。しかも、本指令に指示されているとほとんど同じ方法で解決された。日本側は、コルベット艦ボサドニク号艦長が破損修理の必要性からやむなく島に寄港したということについて、疑念を単に示唆しているだけとはいえず、現在でも完全に納得はしていない。しかし全体としては、この行為を我が国政府が指示したものとはいささかも取らず、基本的発想は艦隊司令官に帰すものと見なされている。一方、具体的部分、特に暴力的手段については、コルベット艦艦長個人に非があるとされ、それ故に彼は対馬の英雄と揶揄され、フヴォストフとダヴィドフになぞらえられている。私はこちらでは政府の代表者としてのみならず、民衆の間の評判についても言及しているのである。ビリレフが対馬に作った建造物は現在すべて撤去されている。ただし、当地に東シベリア総督、沿海州軍務知事、艦隊司令官が滞在中は、諸閣下同士の会話の中で、誰の指令で為されたのか

を私が知事【奉行のことか?】に尋ねるべきであるとの意見が出されていることも事実であり、皇帝侍従武官ポポフ海軍少将が最近当地に來られた際にも同様の要望が再び私に出されている。しかし私はこの件については、『新たな交渉には入らないこと、さもなくばこの件については、今日まで何ら話題にすることはしていない。しかも日本側の回答は前もって予想できる。すなわち、現地上層部は建造物受納の受領書を下付すべきであったが、建造物の合法性に関する問題を決定する責任を負うことができなかった、というものである。一方政府はこの件について、現行の条約に反するものと見ていて、その見方は諸外国の代表から支持されているとしていて。従って私はこの問題は私が江戸に出発するまでそのまま放置しておくつもりである。江戸に行けば、局から日本政府宛に送付された書類についての話し合いの際に機会があるかもしれない。』

「別の問題、すなわちサハリン島南部に関する問題の現状は次の通りである。日本人はサハリンで少しずつ自分たちの殖民を強化しており、現地の諸侯に対して彼らを庇護するという条件付きでサハリン沿岸の漁業権を与えている。ちなみにこのやり方は日本全国共通のものである。島の原住民であるアイヌ人は（エゾ島におけるとまったく同様に）完全な抑圧状態にあって、ロシア人とはどんなかたちであれ接触することは禁じられている。このような行動は両国間の現行条約を知らない現地の小役人の個人的裁量に起因するもので非法であるとの私の認識に対して、当地の奉行は、現地の役人はそのような場合箱館奉行から受ける命令に従って行動していると回答し、アイヌ人は純粋な日本人と同様日本臣民であるというのが彼の判断であった。それに対する私の反論、すなわち、土地は条約によれば日本に帰属はしない以上その原住民も、日本

人によって征服されていない、自発的に服従していない者は日本には帰属しない、に対しては未だに回答は得ていない。』

「横浜でコルベット艦ボサドニク号艦長ビリレフ侍従武官に関してかんばんしくない噂が流れている。それによれば、彼は長崎奉行に水先案内人を出すよう要求し、奉行が、ヨーロッパ人に開港されていない港へは出入りをしないという条件を付けたところ、武装した水兵を引き連れて奉行のところに行きシベリアへ連れ去ると言って脅したと言うのである。奉行は讓歩したが、翌日亡くなった。コレラが原因という説と自殺という説と二通りの風評が流れている。村垣淡路守と会談をした際、噂について、「ビリレフ艦長が長崎奉行とちよつとしたいさかいを起こしたらしいが」と一般的な表現で探りを入れてみた。しかし彼は私に、「そのようなことは何も聞いていない、奉行はとつとくに任を解かれた、一時的にその職に当たっていた検事は最近亡くなった」、と断言した。噂が彼の所まで本当に行っていないのか、噂自体が作り物なのか、それとも彼は、対馬でのビリレフの暴力的行為についての知らせをすべて私に隠蔽していたと全く同様に、噂も隠蔽しているのか、正確なところは私には言えない。

「ロシア人がこれまで日本で他のすべての外国人に比してはるかに民衆から愛されてきたことは、誇張ではなく言うことができる。その理由は沢山あるが、最も主要なのは、我民族に生来備わっている温厚な態度である。これまで日本人が関わってきたのは我が国の水兵たちであるが、彼らは他の国々から来た同じ海の仲間とは著しく異なっていて、酒が入った状態の時でも喧嘩を引き起こすことは稀で、むしろ友好心を発露する方向に向かう。艦長諸氏におかれては我々に対して日本人が抱いている好意を維持するよう努めることが望まれる。箱館。一八六二年十月十四日」

日本国内の情勢はかなり緊迫していた。一八六四年三月四日 I・A・

ゴシケヴィチは、将軍が日本人のために再び国を閉ざす意向があると伝えていた。それを考えれば、ロシア領事の平和愛好的姿勢はなおさら貴重なものであった。それについて当時の外務大臣ゴルチャコフは次のように記している。「箱館は、他の港のヨーロッパ人居留地の生活につきものの恐ろしい凶行はひとつも起きなかった唯一の港である……」

時は一八六五年に入る。十月六日ロシア外務省は海軍省に次のことを伝えた。「箱館に領事館が置かれていた八年間ロシア人と現地住民との関係は極めて良好であった。日本政府は、日本通貨への外貨両替、領事館建物のための土地提供についてのゴシケヴィチの請願をすべて聞き入れ、露日関係のすべての問題に関して会談を行い、日本の首都にロシア公使がないので箱館にいる我が国の領事を日本におけるロシア国代表と見なすと明言した。」

しかしながら日本国内には暗雲が立ちこめていて、そのことは容易に察知された。「野蛮人は出て行け!」という叫び声が頻繁に聞かれた。箱館でも外国人に対する不満が露わになり、英国人から始まりロシア人にも及んだ。

これらの出来事を目撃者である一人の水兵は次のように記している。「……二月一日箱館でロシア領事、領事秘書、コストロフ海軍少佐、医師の住いの建物が焼けた。火元はロシア領事館の隣接する英国領事館であった。」

ゴシケヴィチ領事は、最近収集したコレクションのほとんどすべて、および、東洋学者にとって極めて学術的価値のさわめて高い蔵書の一部を焼失した。

火災は深刻な損失をもたらした。領事館は寄る辺を無くした。再度仏教寺院に仮住まいするのは危険があった。武士達の宗教的狂信は、A・S・グリボエドフが殺された一八二九年二月十一日のテヘランでの出来

事のような悲劇的結末をもたらしかねなかった。ヨシフ・アントノヴィチは職員全員と共に露米会社の船に移り、ほどなく日本を後にした。

この時点でロシアは自国の領事を箱館から召喚せざるをえなかった。この時ゴシケヴィチ領事が祖国に向かった帰路は上海―キャフターシベリアというルートではなく、香港―シンガポール―紅海、そして、建設がすでに最終段階に入っていたスエズ運河の沿岸の一部というものであった。こうしてヨシフ・アントノヴィチは三回目の世界一周旅行を行ったのである。

東洋学に関係するI・A・ゴシケヴィチの著作のうち主なものは次の通りである。

I・A・ゴシケヴィチ 中国人における墨、白粉、紅の製造法。在北京ロシア正教団紀要。サンクトペテルブルグ、一八五二年、第一巻。

I・A・ゴシケヴィチ 中国式会計について。在北京ロシア正教団紀要。サンクトペテルブルグ、一八五二年、第二巻。

I・A・ゴシケヴィチ 日本語の起源について。ヴィリノ。一八九九年。出版者I・ザヴァドスキー。

I・A・ゴシケヴィチ 香港―ロシア人旅行者のメモより。在北京ロシア正教団紀要。サンクトペテルブルグ、一八五二年、第三巻。

I・A・ゴシケヴィチ 和露辞典。サンクトペテルブルグ、一八五七年。

この最後の著作『和露辞典』について詳しく見ていくことにする。この辞書は、本の扉に記されているように、日本人橘耕齋の助力を得てI・ゴシケヴィチの編纂になるもので、一八五七年八月二十八日の日付の序が付され、皇帝の許可を得て外務省アジア局により、Ya・I・イオンソン&R・ゴリケ印刷所で印刷された。ロシア国立図書館(サンクトペテルブルグ)の「アジア・アフリカ諸言語による文献セクション」に

『和露辞典』の現物が保存されている。四八〇頁の厚冊で天金、褐色の表紙で金の型押しが入ったものである。興味深いことに、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部に『日本人橋耕斎の助力を得てI・ゴシケヴィチの編纂になる和露辞典』（サンクトペテルブルグ、一八五七年）が所蔵されているが、天金ではなく頁数も四六二頁とやや少ない。これらは実質的に同一の本で、I・A・ゴシケヴィチの序も内容も同じである。

序の中でI・A・ゴシケヴィチは、日本の文字体系を簡略的に特徴づけ、ヨーロッパにおける日本語研究について述べ、最も早い時期の文法および辞書（一六〇―一七世紀）から始めてそれらの特徴を記述している。「…本辞典の編纂に私が着手した時に私は、ヨーロッパの東洋学者による最近の著作すべてについて何も知るところがなかった。日本に滞在する機会を得た私はそれら著作を今までごくわずかしら知られていない、この言葉の知識を得るために、利用することを決心した。しかしながら最初の段階での成功は遅々たるものであった。というのも長崎の日本人通訳は自分たちの言葉に関する情報を伝えることに対して露骨な反発を示したからである。しかしながら、私にとって他の面では不幸であった状況が幸いした。フリゲート艦デアナ号の沈没と戦時という状況により、我々は半年以上日本人の手厚いもてなしを享受することとなったのである。その一方で、条約が最終的に締結され日本人と我々とが親しく知り合うようになったことから日本人に信頼感と率直さが生まれ、共通の不幸が我々を近づけたのである。その後ほどなくして私は捕虜となり英国軍艦に十ヶ月滞在したが、その間、何らかのことに使う必要があるほどの十分な余暇を手にした。

「私の手許には、日本の友人たちから贈り物として受け取った幾らかの本があったが、その中に五冊ばかりの小さな辞書があり、そのうち最

も良いものを選んで和露辞典の元とした。

「しかし私の仕事上での重要な手助けのひとつであったのが、状況の幸運な一致により現在アジア局所轄にある日本人橋耕斎の口頭による説明および解釈であった。アジア局は皇帝陛下の御許可と辞典の出版費用を請願により下付され、自己資金でも私を援助してくれた。

「日本語辞典の印刷には重大な困難が伴った。日本文字の完全な活字、および特にそれに対する不可欠な補足となる中国文字の活字がここにはなく、かといって、両方を製作するには多大な出費を伴い多くの時間を要することは想像に難くない。そこで、活字印刷と石版印刷を連動させる特別な印刷方法が取られた。予め活字に組んで点検済みのロシア語テキストを石版印刷で用いられるインクで印刷し、残された余白部分に日本と中国の語が書き込まれ、その後で全てを石版に移し替え最終的に石版印刷所で印刷された。」

完成した著作をI・A・ゴシケヴィチは、東洋学者で中国学専門家のアヴァクウム神父と北京正教団時代の同僚で有名な植物学者A・A・タタリノフに見せた。十二月十八日国庫金での辞典の出版に対する皇帝の許可が下りた。八年後に辞典は世に出た。帝室科学アカデミーはI・A・ゴシケヴィチの著作にデミドフ章を授与し金牌が手交された。

一八五七年はゴシケヴィチが中国学者としてまた外交官としての功績を認められた年であった。表敬、功労金、勲章が続いた。一八五六年八月二十六日付の布告に基づいて彼は一八五三―一八五六年のクリミア戦争を記念したアンドレエフ大綬に黒ブロンズのメダルを授与された。更に一八五七年十月十六日付の皇帝陛下の詔書で王冠付きの聖アンナ二級勲章と同時に銀貨五〇ルーブルがゴシケヴィチに下付されることが公布された。またこれに先立ちヨシフ・アントノヴィチは「十五年間模範勤務功労賞」を授与された。

カザン帝国大学は創設予定の日本語学科の教授職への招聘状を彼に贈った。十九世紀二〇〜三〇年代にロシアの東洋学は後の輝かしい発展の強固な学問的基盤を確立していた。カザンはロシアの多くの東洋学者の活動の中心地となった。一八四〇年の「祖国雜記」に次のように記されている。「カザンの哲学学部東洋学科はロシアの教育施設の中で卓越したものであるのみならず、全ヨーロッパの同様の施設およびアジア協会の学者の範囲の中でも荣誉ある場所のひとつである。」

日本に在る間 I・A・ゴシケヴィチは相当数の書籍を収集したが、その内の多くは箱館の領事館建物を焼いた火事の際に焼失した。二〇世紀の初めに I・A・ゴシケヴィチの書籍コレクションの一部がロシア科学アカデミーのアジア博物館に納められた。

アジア博物館の日本書籍コレクションは、一七九一年と一七九五年にエカテリーナ二世により科学アカデミーに寄贈されたものが最初である。その内訳は主として日本の都市図およびオランダ書籍の日本語訳である。一八三〇年、アジア博物館はシリントグ男爵の書籍コレクションを入手したが、その中に日本の都市図が含まれていた。

一八四〇年、科学アカデミーの依頼でアカデミー会員プロッセにより中国と日本の書籍カタログが作成された。その中には以前からのコレクションすべてが入っている。

プロッセのカタログに入っている日本書籍を概観し注目を引くのは、日本語・アイヌ語辞典、そしてシリントグ男爵から入手した日本地図および都市図である。地図および都市図はすべて一八世紀の木版である。シリントグ男爵のコレクションの中からここに入ったものに日本と中国の貨幣に関する一連の書籍がある。他の書籍、例えば、小説集の端本、手紙文集、独演劇の台本などは偶然に入手されたものと思われる。

アジア博物館に入っている他の日本書籍も上記に劣らず偶然的性格の

ものである。例えば、プレトシネイデルの遺産の中から日本植物学に関する書籍が三点納められている。

その後一八九九年に K・N・ボシエトの日本書籍小コレクション（十三点）が納められたが、その中には日本地図、魚を描いたもの、日本の陸軍と海軍の歴史なども含まれている。

『ロシア科学アカデミーアジア博物館一八二一〜一九一八』(サンクトペテルブルグ、一九二〇年)と題した概説案内に次のように記されている。「一九一〇年、故ゴシケヴィチ氏の遺族から日本書籍コレクションが入手された。コレクションは一四四点から成る。残念ながら、コレクションは何らの計画なしに編まれたもので、故に何らかの完全なコレクションというには無理がある。コレクションのほとんどは木版のもので、その中には日本でも入手が相当困難な一七世紀のものも含まれている。

「もし我々がこのコレクションの書籍を部門別に分割することを試みるならば、各部門の中に日本学者にとって相当な興味を引き起こすものを上げることができようである。」

「文学関係の書籍の中には『古事記』、『日本紀』の刊本およびそれに対する注解本が含まれている。更に一連の作品集とそれに対する注解本、『万葉集』注釈および一八〇五年の木版テキスト、一六四五年刊の絵入り『源氏物語』の保存良好なものがある。

「以上の他に特筆されるものに、馬琴による中国の小説の改作で北斎の挿画付き二点、『南北太平記』の挿画入り刊本がある。

「歴史関係の書籍はごく僅かで、古代に関するもの数点と徳川時代の歴史に関するもの一点のみである。特に挙げるとすれば、『三代実録』の一六七三年の刊本がある。さらに、『大宝律令』の注解本『令義解』もある。『令義解』は養老令の注釈書」

『和訓之栞』などの古い日本の辞書数点は辞書部門を構成する。言語

関係の書籍は約六六、主立ったものとして本居その他の「和学者」の著作がある。

「大きな部門を成すのが地理学的地図および見取り図である。色彩地図として日本の各地方の木版図。京都から江戸までの今日も興味深い街道地図。これらの地図はすべて一九世紀のものである。地理的記述に関するものとしては日本の北部およびサハリンの関する書籍があるのみである。

「興味深いものとして、一八一一〜一八一三年に日本人の元で捕虜になつていたゴロヴニン船長について一八二五年に書かれた手稿本『遭厄日本紀事』がある。

「その他に更に挙げるとすれば、戯画本二点および挿画入りの小型本八点、その中には「漫画」(北斎)、「百千鳥」(歌麿)その他がある。興味深いものとして、様々な流派の日本庭園の図の入った「築山庭造伝」がある。」

I・A・ゴシケヴィチの外交官活動および極東における国際情勢について言えば、以下に挙げる刊行物および文書の中にほぼ完全に反映されている。ロシアの外交活動および日露関係の生成を扱った専門刊行物には、日露通商条約ならびに国境協定の原本が収められていて、それによってロシア外交の成果を分析することができる(E・D・グリム『極東における国際関係史に関する条約およびその他の文書集一八四二〜一九二五』モスクワ 一九二七年、ロシア外務省『極東問題に関する条約および外交文書集』サンクトペテルブルグ 一九〇六年)。E・B・プチャーチン、N・N・ムラヴィヨフの公刊された報告によって一八五四〜一八五五年、一八五九年の交渉経過を取り巻く政治状況を把握し、祖国の外交官たちが日本の全権代表に様々な譲歩をしていった際に指針としていた動機をあきらかにすることができる(I・P・バルスコフ『N・N・

ムラヴィヨフ・アムルスキー伯爵…その書簡、公式文書、同時代人の話印刷物による、伝記資料』モスクワ 一八九一年 第二巻 二七六〜

二七九頁)、『我国艦隊の日本および中国への航海(一八五二〜一八五五年)についての侍従武官長プチャーチン伯爵の皇帝宛報告書』、『海軍論集』一八五六年第四号 一五〜二一頁)。一八五三〜一八五四年のプチャーチンと日本代表との交渉に関する重要な資料が、その外交使節団の参加者でロシア作家のI・A・ゴンチャロフの通信記事の中に含まれている

(I・A・ゴンチャロフ『一八五三年初めと一八五四年末の日本におけるロシア人』サンクトペテルブルグ 一八五六年)。上記以外に以下幾つかの文献を挙げる。M・ヴェニコフ『現状における日本列島概観』

サンクトペテルブルグ 一八七一年、K・ポシエト「世界周航各地からの書簡」、『海軍論集』一八九五〜一八九六年、A・コロコリツェフ『ロシア士官の日本・下田滞在記』、『海軍論集』一八五五年。興味深いものに国立海軍中央文書館のフォンドの中の文書がある。また、史料の大部分はロシア帝国外交文書館のフォンドに集中している(以下、フォンド番号、史料概要、史料の最も早い日付と最も遅い日付)：

フォンド二〇一。箱館ならびにロンドンのロシア領事の外務省宛報告。日本が他の諸国と締結した条約の写しを外務省に送ったことについて。一八六二年九月二十四日〜一八六三年六月二十一日。

フォンド二二二。在箱館ロシア領事ゴシケヴィチのロシア外務省宛報告。日本滞在中のロシア軍艦が歓迎式あるいは他の国の式典に参加した際の礼砲が秩序を欠いていたことについて。この件に関するロシア外務省と海軍省の往復書簡。一八六二年八月二十五日〜一八六三年八月二十八日。

フォンド二二三。在箱館ロシア領事ゴシケヴィチのロシア外務省宛報告。日本のスクーター軍艦亀田丸のロシア沿岸への出発について。一

八六一年五月二十四日～一八六一年十一月二十八日。

フォンド一三一〇。対日外交通商関係樹立の目的を持った侍従武官長プチャーチン海軍中将指揮下の海軍遠征隊の日本への出発について。同問題についてのプチャーチン侍従武官長と日本政府との交渉ならびに通商および国境条約を下田にて日本全権代表と締結したことについて。同様に、遠征時プチャーチン侍従長付きであったアバクウム官長と外務省役人七等文官ゴシケヴィチについて。一八五二年四月三十日～一八五三年十月四日。

フォンド一三二二。アバクウム官長と七等文官ゴシケヴィチへの報酬と奨励金についてのプチャーチンの請願。一八五七年二月十八日～一八五八年八月九日。

フォンド一三一六。一八五七年十月二十四日長崎で侍従武官長・海軍中将プチャーチン伯爵と日本政府との間で締結された補足条約の批准について。およびに、同条約の批准書交換、我が国側から在箱館領事六等文官ゴシケヴィチに委任されたことについて。一八五八年三月一日～一八五八年十一月五日。

フォンド一三二〇。サハリン島分界に着手したいとの日本の提案と島における日本の地位強化行動についての外務省と在箱館領事館（ゴシケヴィチ）、東シベリア総督コルサコフ、沿海州軍務知事カザケヴィチ、海軍省その他との往復書簡。一八六〇年八月二十七日～一八六八年十二月十四日。

フォンド一三二一。リハチョフ海軍大佐の上申書。ロシア軍艦ボサドニク号の対馬島の港での長期停泊に関するロシア外務省と在箱館ロシア

領事館（ゴシケヴィチ）、日本外務省、リハチョフとの往復書簡。一八六〇年七月二十八日～一八六二年十一月二十四日。

フォンド一三二五。日本政府からポニン【小笠原】諸島占拠について我が国領事に通知があったことに関するロシア外務省と在箱館ロシア領事館との往復書簡。一八六三年二月二十六日～四月二十日。

フォンド一三六五。在箱館ロシア領事ゴシケヴィチの東シベリア総督宛の報告。一八五二年六月九日～一八六一年十二月十九日。

フォンド一八一四。ロシア外務省、沿海州軍務知事その他の外交至急文書（在箱館初代ロシア領事ゴシケヴィチ宛の訓令）一八五八年二月十五日～一八五八年九月十七日。

初代在日ロシア領事についての記憶は今日に至ってもなお生きている。ロシアと日本の両国民の友好と相互理解の礎を築いたI・A・ゴシケヴィチはその名を世界地図に永久に留めている。すなわち、彼を称えて日本の湾が命名されている。二〇〇一年九月、函館市役所はヨシフ・ゴシケヴィチの胸像を正教会の敷地内に設置することを決定した。

I・A・ゴシケヴィチは日本民族に暖かく応え、偉大な将来を日本民族に予言した「日本民族は、ほんの最近殆ど強制的に文明ヨーロッパの一員の中に組み入れられたが、その場所への権利は内的親縁関係により以前から持っていた。日本民族がすべての人を驚かしたエネルギーと文明への熱意を発揮したのもそのためではなからうか。それに対してツラングループの他の民族において見られるのは全くの無関心である」〔『日本語の起源について』 ヴィリノ 一八九九年 一〇九頁〕。

（翻訳：有泉和子）

本研究集は、科学研究費補助金基盤研究A「前近代東アジアにおける日本関係史料の研究」（課題番号15202017、研究代表者：保谷 徹）の一環として、その経費の一部も使用して行なった。